

報 告

第 68 回通常総会・第 105 回講演大会記事

昭和 58 年 4 月 2 日第 68 回通常総会、名誉会員推挙式、表彰式、特別講演会が、また 4 月 1 日、2 日、3 日の 3 日間第 105 回講演大会がいずれも東京大学（東京都文京区本郷 7-3-1）で開催された。

第 68 回通常総会

第 68 回通常総会は松下会長が議長となり、木下本会専務理事司会のもと、4 月 2 日東京大学法学部 25 番教室で開催された。冒頭に松下会長の挨拶が行われた。

本日ここに諸先輩をはじめ、多数会員諸兄のご出席のもとに、社団法人日本鉄鋼協会第 68 回通常総会ならびに第 105 回講演大会を開催するに当たりまして一言ご挨拶申し上げます。

東京大学関係各位のご理解によりまして工学部の建物および法文 1、2 号館を会場として使用できましたことは、有難く厚く御礼申し上げます。

アメリカの経済は最近になって漸くやや明るさを取り戻しつつあるように伝えられているが、この 1 年間は不況一色の世界経済であつた。従つて、国内需要はおしなべて低迷し、輸出も減少したことは、すでに承知の通りである。鉄鋼業界もこの例外ではなく、各社とも大幅な減産を余儀なくされております。

この中であつて鉄鋼各社は、多種多様な方策のもとに省エネルギー化、製品歩留の向上などあらゆる努力を続けているが、今後においても製品の高品質化と多様化、生産の合理化などにはさらに新しい自主技術の開発を進めることが不可欠である。これがためには、鉄鋼業における技術者、研究者の確保ならびに人材育成には、なお一層の努力が望まれる。

私はこの点において日本鉄鋼業を技術面から支える学会として、当協会の責任の重大さを痛感すると共に、基礎研究の充実と生産に適応する新技術の開発に一層の努力を続けなければならないと考えている。

当協会はこのような見地のもとに、従来から共同研究会、特定基礎研究会、鉄鋼基礎共同研究会、各種研修事業等あらゆる事業を通じて技術の向上と人材育成に努めてきた。昨日からはじまりました第 105 回講演大会発表論文数をみますと最高レコードを樹立した昨年秋の札幌大会には及ばないが、昨年春の大会を 87 件上廻る 748 件という盛況を呈している。しかも鉄鋼製品の高品質化、多様化などの社会的要請にこたえて、特に加工分野で伸びが著しくまた鉄鋼の関連業種あるいはユーザーとの

共同研究が目立っている。

更に上工程から製品にいたるまで、日進月歩のソフト技術が数多く発表されている。また討論会においても高品質焼結鉱から鉄鋼の水素脆化の解明にわたる 5 つの適切なテーマによつて、会員諸兄の相互研鑽が期待される。

このほか当協会の多くの事業経緯と計画についての詳細は後刻佐伯理事からご説明申し上げる。

最後に私は次の 3 点を申述べて会員諸兄のご協力を仰ぎたい。

第一に昨年末、10 年振りに実施した会員アンケートの結果を尊重し、これを子細に分析して和文会誌、講演大会などの将来像を考えてゆきたい。

第二に講演大会は、年毎に盛況を呈しているが、大手企業を中心とする従来型に加え、なお一層幅広い階層からの発表を期待したい。

第三に現在、学生会員数は総数の 3% にも満たず、外国会員数にも及ばないのは、大変残念であり、後継者育成も兼ね、学生会員の勧誘に大いに努力したい。

以上挨拶が行われた後、総会の議事に入った。付議された案件は次のとおりである。

議案第 1 号 昭和 57 年度事業報告、収支決算ならびに財産目録の件

議案第 2 号 昭和 58 年度事業計画ならびに収支予算の件

議案第 3 号 理事、監事ならびに評議員選挙の件

初めに議事進行上、議案第 3 号理事、監事ならびに評議員選挙から始められた。選挙管理委員に湯河透君（神鋼）伊藤雅治君（鋼管）を選び投票が行われ、別室において開票に入った。続いて議案第 1 号ならびに第 2 号が関連しているので一括議題として事業と会計に分けられた。

昭和 57 年度事業ならびに昭和 58 年事業計画について佐伯理事（企画委員会委員長）より次の報告がなされた。

（講演大会・出版事業）

講演大会は、春は東京、秋は北海道において、それぞれ 3 日間の会期を以つて開催し、講演発表数は 1538 件を数えた。

昭和 58 年度春の大会は、すでに開始されているが、秋の大会は秋田で開催を予定している。

和文会誌「鉄と鋼」は、研究論文の投稿数増加とともに

に、会員諸兄の意向を反映させ、報告、解説記事等を掲載するなど、内容充実を図っている。

特に、講演大会での発表数増加に伴い、昭和 57 年度も、講演概要集を春秋各 2 冊計 4 冊とし、普通号 12 冊と合せ 16 冊発行した。

また、欧文会誌「Transactions ISIJ」は、優れた研究論文、技術資料のほか、春秋の講演大会の概要を掲載するなど、一層の充実を努めている。この結果、外国会員をはじめ、海外の読者も増えつつある。

そのほか、昭和 54 年度から改編出版を開始した「鉄鋼便覧」は、昭和 57 年度において「二次加工・表面処理・熱処理・溶接編」ならびに「鑄造・鍛造・粉末冶金編」の 2 冊を刊行し、この刊行をもつて全 6 巻 7 冊、全出版を完了した。この出版は、責任者・佐藤忠雄殿をはじめ 1000 名を越える関係者のご協力により、完結したものである。このほか、「わが国における酸素製鋼法の歴史」「鋼材マニュアル 熱延鋼板、冷延鋼板」等、5 点を発行した。

昭和 58 年度は、鉄鋼科学技術史の「製鉄編」と「材料編」、鋼材マニュアルシリーズ「棒線編」、共同研究会「厚板部会特別報告書」および「会員名簿」ならびに英文の「鋼の連続鑄造」等を企画している。

(技術講座・工学セミナー等)

西山記念技術講座は、鉄鋼業における最も新しい学術技術を系統的にまとめ、会員諸兄の知識向上を目的としており、昭和 57 年度は、東京・大阪・岡山の各地において、計 8 回開催した。

鉄鋼工学セミナーは、生涯教育の一環として、講師と受講者が 1 週間に亘り宿舎に同宿して行っており、昭和 57 年度は、138 名の参加者があつた。

さらに、一昨年春の総会の折に、日本鋼管(株)から寄贈された白石元次郎記念資金により、「鉄鋼業とコンピューター」をテーマとして、東京・大阪で白石記念講座を開催した。昭和 58 年度は、西山記念技術講座、鉄鋼工学セミナーおよび白石記念講座とも、前年度と同規模にて予定している。

(調査研究事業等)

鉄鋼技術全般に亘る共同研究会は、現場的立場からの研究と情報交流を 18 部会の構成により行っており、参加者への寄与は大きい。

一方、当協会と日本金属学会、日本学術振興会の 3 者による鉄鋼基礎共同研究会については昭和 57 年度は「鋼材の摩耗部会」「介在物の形態制御部会」「融体精錬反応部会」および「連続鑄造における力学的挙動部会」の 5 部会が活動し、大きな成果を収めた。そのほか、

「高炉内反応部会」は、昨年度に研究を終了し、その報告書を刊行した。昭和 58 年度は、前年度と同じ 5 部会で、同規模の活動を計画している。

また、当協会では、独自の重要基礎研究を、特定基礎研究会で行っており、昭和 57 年度は、「原料炭の基礎物性部会」「鋼材の表面物性部会」「石炭のコークス化特性部会」の 3 部会が活動したが、この内「原料炭の基礎物性部会」は、昭和 57 年度末をもち、研究を終了したので、昭和 58 年度は 2 部会となる。

次に、標準化委員会については、鉄鋼関係 JIS 原案の作成、当協会規格案の作成、鋼材特性に関する各種データシートの作成、シャルピー衝撃試験機の校正用基準片の製品化、ISO 規格の日本側意見のとりまとめ等、幅広い活動を行っている。特に昭和 57 年度は、「構造用鋼板の破壊靱性値データシート」を出版した。

また、鉄鋼標準試料委員会は、化学分析用・機器分析用等合せて 353 種にのぼる標準試料を製造頒布し、国内外の鉄鋼分析技術の向上に努めている。昭和 58 年度には、従来事業のほか、濃度 99.95% の超高純度鉄の試料製造をはじめ、新規 3 種更新 43 種の試料の製造を予定している。

(情報事業)

日本科学技術情報センターとの協力のもとに、金属関係文献を抄録し、検索システムへの入力作業を行うとともに、端末機によるシステムの利用と普及に努めている。

このほか、機関誌「鉄鋼技術総覧」の毎月の発行と、各種国際会議のプロシーディングスおよび数値データ集の収集整備を行つた。また、共同研究会部会資料のマイクロフィッシュの効率的利用のため、「索引集」の編集発行事業を開始した。昭和 58 年度は、従来事業の充実に加え、「鉄と鋼」のバックナンバーのマイクロ化と頒布を計画している。

(国際関係)

昭和 57 年度は 11 月から 12 月にかけて第 7 回真空冶金国際会議を東京で開催し、参加人員 415 名、発表論文数 177 件であつた。2 国間シンポジウムについては、5 月にドイツで日本・ドイツセミナーを、6 月に東京で日本・ベネズエラシンポジウムを開催した。

昭和 58 年度は、国際会議はないが、2 国間シンポジウムとして、6 月にモスクワへ、9 月にはチェコスロバキアへ日本代表団を派遣し、国内では 10 月にオーストラリアから、そして 11 月には中国からそれぞれ代表団を迎え、2 国間シンポジウムを開催する予定である。

(表彰関係)

昭和 57 年度から、鉄鋼関係の共同研究を賞する山岡

賞がスタートした。

また、元会長故山岡武殿ご遺族から表彰資金として、300万円の寄贈の申し出があり、本年2月の理事会で拝受した。昭和58年度からは、従来2年毎に行っていた三島賞ならびに林賞の表彰を毎年行うことになった。

(ISO 関係)

ISO・TC17 および SC1 の幹事国業務は過去の実務経験を生かし、処理案件を順調にこなすと共に、ISO 本部あるいは各国で開催する会議への参加等を精力的に行っている。さらに、昭和57年度は、これら通常業務に加え、ISO・TC17 東京総会を10月に、同 SC1 東京会議を5月に実施し、TC17 においては13件、SC1 においては16件の決議を採択した。昭和58年度においても国際的責務を果す所存である。

また、昨年春の総会において、住友金属工業(株)から寄贈を受けた日方向学術振興資金による事業は、若い研究者が優れた論文を海外の国際研究集会に発表することを奨励する意味で、その費用を援助することにした。昨年秋には、昭和58年度にその費用を交付する為の選考を行い、応募者の中から5名を決定した。

昭和58年度の募集も間もなく開始する。

引き続き古茂田理事(会計担当)より昭和57年度収支決算ならびに昭和58年度収支予算について報告された。

(決 算)

まず一般会計決算の結果、収入は9億0,354万8,926円となった。本年度は会誌刊行物、鉄鋼標準試料、印税収入および広告収入等の増収があつたので、収入予算に対し2,716万5,711円の増収となつた。

一方、支出決算の結果は、会誌費、刊行費等の支出増のほか、積立金の蓄積を行い、支出総額は、予算に対し442万6,664円の支出減となつた。

この結果当期剰余金3,159万2,375円をもつて昭和57年度を終了した。

(剰余金処分)

次に剰余金の処分ですが、その全額即ち3,159万2,375円を次年度に繰越し、昭和58年度財政を充実したい。

(財産目録)

決算の結果、昭和57年度末現在の一般会計保有の純財産は、2億6,100万9,292円である。

(別途資金会計)

別途資金会計は表彰ならびに事業資金ほか15の会計を有しており、それぞれの目的に応じ特別資金運営委員会、理事会の議を経て支出し、または蓄積されており、ここでは特に、白石元治郎記念資金による第一回記念講

座が開催されたのでその支出が計上されている。また、本会元会長故山岡武殿ご遺族さまから表彰ならびに事業資金に300万円の寄付金収入があつた。

(補助金事業等会計)

15の特別会計を有し、補助金、委託金あるいは他団体の分担金等により運営しており、ISO・TC17、同 SC1 両幹事国業務会計、高級ラインパイプ研究会計をはじめいずれも充実した事業を行っている。

(予 算)

(一般会計)

まず一般会計ですが、従来より見易くするために費目の配列を改めた。収入の部では、前期繰越金を含め総額8億7,833万7,254円を計上した。本年度は出版物等の刊行事業収入、個人会員増加を予定した会費収入等の増収を見込んだ他、国内炭活用会計からの繰入金1,249万円余を計上した。支出の部では、昭和58年度は大変厳しい予算編成方針のもとに編成した。

刊行事業費では、和文会誌を本年度も16冊発行することとし、欧文会誌12冊、特別報告書類5点および会員名簿の発行を計上した。

さらに、調査研究事業費については、熟延プロセス冶金研究委員会発足に伴う予算増のほかは、おおむね継続事業であり、内容の充実に重点をおき、極力節約を計つて予備費を含め8億7,833万7,254円を計上した。

(別途資金会計)

本年度は、新たに日方向学術振興資金による事業が予算化されておるほかは従来と変りない。

(補助金事業等会計)

これらは大方継続事業であるが、一般会計における特定基礎研究会の「石炭のコークス化特性部会」の費用に充てる為、国内炭活用会計から1,249万余を一般会計へ繰出した。

そのほか ISO 幹事国業務会計ならびに高級ラインパイプ研究会計等を予算化している。

以上議案説明の後、矢野監事より監査の結果報告がなされ、満場一致をもつて議案第1、2号が承認された。

引き続き先に行われた選挙の開票が終わり選挙管理委員より候補者はいずれも絶対多数で当選された旨報告された。ここで会長、副会長、専務理事、常務理事を互選するため臨時理事会が開催され、会長に松下幸雄君(留任)、副会長に上杉年一君(新任)、中村正久君(留任)、専務理事に木下亨君(再任)、常務理事に三井太信君(留任)が互選された旨議長より報告され、通常総会が終了した。

名誉会員推挙式 新名誉会員に次の二氏が推挙され

た。

武田喜三君 (大同特殊鋼(株)取締役相談役)

佐藤忠雄君

表彰式 続いて表彰式に移り、下記のとおり各賞の授与式が行われた。

渡辺義介賞 池田 正君

西山賞 井上 道雄君

服部賞 小島 賢介君 白松 爾郎君

香村賞 青木 宏一君 澤 繁樹君

渡辺三郎賞 阿部 芳平君 小柳 明君

依論文賞

清水 正賢君 山口 荒太君 稲葉 晋一君

成田 貴一君 前田 正史君 佐野 信雄君

梅本 実君 西岡 伸夫君 田村 今男君

前田 重義君 浅井 恒敏君 新井 信一君

鈴木 堅市君

渡辺義介記念賞

安藤 駿也君 今井 一郎君 牛山 博美君

大本 裕万君 小島 勢一君 小林 啓二君

鈴木 利勝君 竹内 久彌君 中里 嘉夫君

中田 久也君 蜂谷 整生君 馬場 善祿君

樋上 寛君 森脇 延年君 柳沢 忠昭君

西山記念賞

朝野秀次郎君 飯田 孝道君 井口 泰孝君

伊藤 幸良君 梅田 洋一君 大沢 恂君

河部 義邦君 近藤 嘉一君 佐野 正道君

沢村 栄男君 南雲 道彦君 布村 成具君

原 富啓君 星野 和夫君 渡辺 敏幸君

特別講演会 表彰式につづき次の表彰記念特別講演会が行われた。

1. 「わが国製鉄業をとりまく 2, 3 の問題」

渡辺義介賞受賞 池田 正君

2. 「鉄鋼製錬における二, 三のガス吸収について」

西山賞受賞 井上道雄君

講演大会

講演大会は 4 月 1 日, 2 日, 3 日の 3 日間東京大学法学部, 工学部で開催された。

講演大会 講演数は製鉄関係 129 題, 製鋼関係 160 題, 加工・システム関係 183 題, 材料・分析関係 238 題, 計 710 題が 18 会場にわかれ, 講演ならびに討議が活発に行われた。

討論会 上記講演の他, 次の 5 テーマ 29 題の講演による討論が活発に行われた。

1. 高炉の要求する焼結鉱の品質とその製造方法
座長 西田礼次郎
2. 溶鋼の取鍋処理
座長 江見 俊彦
3. 鉄鋼製造プロセスにおける溶接技術の進歩
座長 中村治方, 副座長 田中甚吉
4. ステンレス鋼・耐熱鋼における窒素の役割
座長 田中良平
5. 鉄鋼の水素脆化機構
座長 南雲道彦, 副座長 寺崎富久長

懇親会 懇親会は 4 月 1 日午後 6 時より如水会館 (東京都千代田区一ツ橋) で日本金属学会と共同開催された。森一美名大教授 (本会理事) 司会のもと松下 (鉄鋼), 三本木 (金属) 両会長挨拶, 英国ケンブリッジ大学 P. K.W. ハニカム博士のスピーチの後, 佐野幸吉氏の乾盃で始まり, 各地から参集した会員諸氏の間で歓談がくりひろげられた。参加者 254 名

ジュニアパーティー 4 月 2 日午後 5 時 30 分より東京大学山上会議所で開催され, 若手技術者, 研究者を中心に自由に懇談がなされ親交を深めた。参加者 200 名